



2019年2月13日放送

印象に残る症例 特別編①

柴葛解肌湯と大青竜湯

ーインフルエンザと戦う漢方の強力な武器 その1

ポランの内科クリニック 院長 板澤 正明

現在、インフルエンザに使う漢方として麻黄湯が広く使われています。私自身は、麻黄湯は余り使わず、柴葛解肌湯と大青竜湯のどちらかを使います。

共にエキス剤はありませんが、柴葛解肌湯は葛根湯と小柴胡湯加桔梗石膏の併用、大青竜湯は桂枝湯と麻杏甘石湯の併用で代用できます。

私は、高橋道史先生の著書『浅田流・漢方診療の実際』でこの2つの処方を知りました。この本に、日本で38万人余りが死んだ1918-19年のスペイン風邪の際、浅田宗伯の一番弟子木村博昭先生が柴葛解肌湯と大青竜湯等を駆使して自分の患者から死者を一人も出さなかったと書かれていました<sup>1)</sup>。これは私にとって驚愕の事実で、いつかこの薬を使ってみたいと思っておりました。

そして、私が最初に柴葛解肌湯を使ったのは、実は私の家内に対してでした。2000年2月のことです。

【患者】私の妻は、当時61歳。身長144cm、体重48kgで平熱は35度台でした。

【経過】2000年2月17日 午後集会に参加。会場のあちこちで咳が聞かれました。会場で少し汗ばむ感じがあり、夜かなりの発汗がありました。

翌朝(2月18日)、38℃の発熱、頭痛、咽頭痛が出現しました。常備薬の麻黄附子細辛湯

と桔梗石膏を服用しましたが、あまり効き目がなく、夜になって全身倦怠感、関節痛も出てきました。桂麻各半湯ないしは桂枝二麻黄一湯の適応と考えられましたが、同夜私は病院の当直で薬を届けることができず、妻はやむなく手もとにあった総合感冒薬医療用非ピリン系感冒剤顆粒と、今ではインフルエンザには禁忌ですがジクロフェナクナトリウムを服用しました。

翌2月19日の朝も頭痛ありジクロフェナクナトリウムを服用しました。桂麻各半湯を処方し午後帰宅しましたが、家内は全身倦怠感著明で床に臥せておりました。食思不振、口渇、咳嗽もあり、桂麻各半湯の時期は過ぎたと判断し、同剤の投与を断念し、やむなく手持ちの柴朴湯と麦門冬湯を与えました。食事はほとんど取れない状態で、病院から持参した補液500mlを施行しました。

翌2月20日も妻は終日臥床しておりました。咳が強く、柴朴湯と小青竜湯を与え、抗生剤クラリスロマイシンも併用しました。それでも咳は止らず、翌日には柴胡桂枝湯と麻杏甘石湯と別の抗生剤にしてみましたほとんど変化なく、コデインリン酸塩を頓用も全く効果がありませんでした。麦門冬湯を服用後、咳は若干軽快しましたが一晩中咳が続きました。

2月22日の朝、頭痛、眼の痛み、項部うなじの痛みがあり、ジクロフェナクナトリウムを服用しました。昼にかけて頭痛はますます増強し「割れるような」痛みとなりました。私は愕然としました。髄膜炎を併発した可能性があり、葛根湯2包の頓用を指示しました。かつて無菌性髄膜炎に葛根湯を使用した経験があったからです<sup>2)</sup>。これが劇的な効果があり頭痛が短時間のうちに軽快しました。太陽病はまだ残存していたのです。ここに至って、これこそが柴葛解肌湯を使うべき病態ではないかと思うに至りました。葛根湯、小柴胡湯、桔梗石膏を処方、夕刻より服用を開始し抗生剤の併用は中止しました。頭痛・目の痛みは軽快しましたが、夜間激しい咳き込みが続きました。

翌2月23日も柴葛解肌湯を継続。咳に対し麦門冬湯の頓用で対処、咳は次第に軽快し、次の日の夜には全く聞かれなくなりました。

その後、体力回復目的に補中益気湯と苓甘姜味辛夏仁湯の内服を開始し、数日の内服で食欲も回復し全身倦怠感も消失し治癒に至りました。

家内がかかった病気は、一切検査をしていませんので、定かではありませんがインフルエンザであったろうと思われます。本人が「死ぬかと思った」と後に語ったほど重症の感染症でした。前半は適切な方剤が手もとになかったこともあり、病邪に一方的に押しまわれ、まことにお恥ずかしい治療になってしまいました。柴葛解肌湯を投与した時から攻勢に転ずることができました。柴葛解肌湯の効果は素晴らしいものでした<sup>3)</sup>。

柴葛解肌湯は、元々は明の陶華という人の処方で彼の著書『傷寒六書』に出ています。

江戸時代に和田東郭はこの処方をよく使いました。その後浅田宗伯が全く新しい柴葛解肌湯を作りました。彼の柴葛解肌湯は葛根湯合小柴胡湯から大棗・人参を去り石膏を加えた処方となっています。

彼の『勿誤藥室方函口訣』によれば、柴葛解肌湯は太陽少陽の合病で頭痛、鼻が乾き、口渇、不眠、四肢が煩疼・うずくように痛み、脈洪数の者を治す効能を有するとされています。『局方』十神湯『六書』の柴葛解肌湯よりは其効優なりとす<sup>4)</sup>と述べています。

矢数道明先生は『漢方処方解説』で柴葛解肌湯の目標と方解を次のように解説されています。

桂枝湯や麻黄湯で発表しても快癒せず、汗がでないでかえって熱勢が加わり、柴胡の証も現われるが表証が去らず、口渇もある。陽明の証のようにも思われるし、また白虎湯のようにも見えるところがある。ただ熱がさかんで頭痛・身体疼痛・鼻衄などがあり、上部に熱が鬱塞して甚だしいときは、譫語狂躁の状を呈するに至ることもある。頭痛・口渇・鼻乾き、また衄血・悪寒して汗なく・四肢疼み・脈洪数のものが目標となります。葛根湯と小柴胡湯とを合わせて石膏を加えるもので、太陽と少陽と陽明と三陽の合病に使います<sup>5)</sup>。

矢数先生のこの解説は、簡潔で非常に適切なものと思われませんが、「桂枝湯や麻黄湯で発表しても快癒せず」という表現に見られるように柴葛解肌湯は初期を少し過ぎた段階で使う薬という意見があります。この点に関して私は異論があります。柴葛解肌湯はインフルエンザ等の初期から積極的に使うべき薬です。

中田敬吾先生は次のように語っておられます。「インフルエンザのように強力な感染力をもったウイルスに感染すると、発病初期から太陽病期にとどまらず少陽病にまたがるときが多いが、この場合に本方が適応する。(中略)インフルエンザで高熱を発し、症状の激しいときは麻黄湯や葛根湯より柴葛解肌湯を用いたほうがより効果的なことが多い。(中略)発病初期からすでに三陽の症状を呈すのは、侵入したウイルスの力が非常に強い場合、それを排除しようとする生体の反応もそれに応じて強くなる。したがって、熱状が非常に強い場合はおおかた柴葛解肌湯証の場合が多く、強力なインフルエンザに対しファーストチョイスの処方として考えて差し支えない。」<sup>6)</sup>

全くその通りです。柴葛解肌湯の真価はインフルエンザ等の初期に使ってこそ発揮されます。葛根湯と小柴胡湯加桔梗石膏の併用で十分代用可能で、私は多くの著効例を経験しています。頭痛、発熱、悪寒、節々の痛み等は、大青竜湯と共通ですが、鼻づまりや咽頭痛、目の奥の痛み等を訴えるときは柴葛解肌湯を使い、鼻汁や咳が強く時に肺炎等を合併するときは大青竜湯にします。今回はその大青竜湯の症例をお話しします。

- 1) 高穂道史. 浅田流・漢方診療の実際. 医道の日本社, 1977, p.304.
- 2) 板澤正明. 無菌性髄膜炎に対する葛根湯の使用経験. 漢方診療. 1985(5), p.26.
- 3) 板澤正明. 柴葛解肌湯についてー三陽の併病の合方的治療. 漢方の臨床, 2000(12), p. 25.
- 4) 長谷川弥人. 勿誤薬室「方函」「口訣」釈義. 創元社, 2005, p.567.
- 5) 矢数道明. 臨床応用漢方処方解説. 創元社, 1985, p.179.
- 6) 中田敬吾. インフルエンザ. 漢方治療指針. 緑書房, 1999, p.79.